2024年3月11日発行

「温泉」というイメージの伝播と変容

――『金色夜叉』における「熱海」と「塩原」に着目して――

安　藤　史　帆

相模女子大学紀要　　VOL.87（2023年度）

「温泉」というイメージの伝播と変容

――『金色夜叉』における「熱海」と「塩原」に着目して――

安　藤　史　帆

Transmission and Transformation of the Image of "Hot Springs": Focusing on "Atami" and "Shiobara" in *Konjiki Yasha*

Shiho ANDOH

要　旨

本稿は、明治の二大ベストセラーとなり、アダプテーションを介して長期的に人気を保ち続けた尾崎紅葉『金色夜叉』を、記号的に受容される温泉表象から捉え直すものである。『金色夜叉』の序盤では熱海、（未完の）終盤では塩原が舞台とされ、そこで主要な出来事が展開されている。従来、その舞台となる温泉の固有の場所性の無さ、空虚さが批判の対象とされてきたが、本稿では次の二点において再考を試みる。第一に温泉から離れた場において現実の舞台や実体としてではなく記憶やイメージとして記号的に温泉が召喚されていること、そして第二にその実体なき熱海に代わる場として塩原という温泉が召喚されていることである。『金色夜叉』テクスト内部にある各々の温泉描出の過程を抽出するのみならず、読者の受容と作者の一戦略に留意しながら、従来批判されたような固有名のみ与えられ借物のごとき場として温泉が醸成された背景とその帰結を明らかにする。

This paper introduces the perspective of "*onsen* (hot springs)" as an important signifier to read *Konjiki Yasha* by Koyo Ozaki, one of the two bestsellers of the Meiji era, which remained popular over the long term by means of its adaptations. The concept of *onsen* has not been traditionally considered as a symbol. Such a function of *onsen*, however, emerges in *Konjiki Yasha,* which uses two *onsen* settings to develop the major events of the story: Atami in the early part, and Shiobara in the (unfinished) end. These *onsen* settings have been criticized by authors such as Yasunari Kawabata for their emptiness, or their lack of inherent spatial specificity. However, what this paper draws attention to is how, in the middle part of the story, *onsen* is invoked not as a physical location or entity but as a memory and image. Specifically, this paper argues that Atami is used to represent, in an extended manner, a fictionalized world away from reality, while Shiobara is later established as an alternative to Atami. This paper seeks to reveal how the image of *onsen* as a borrowed, place-like entity, was developed, and what kind of consequences it led to, through exploring not only the process of depicting each *onsen* in *Konjiki Yasha* but also how the readers received the image and what writing strategies the author employed.

1．はじめに[1]

1897（明治30）年から1902（明治35）年にかけて『読売新聞』に断続的に掲載[2]された『金色夜叉』は、間貫一と鳴沢宮の金と愛をめぐる物語である。明治30年代に登場した本作および『不如帰』は[3]、明治40年代に確立される自然主義文学の本流から逸れる「通俗小説」とされながら[4]、多様なジャンルにわたる夥しいアダプテーションによって[5]、明治以降昭和初頭まで人気を維持したという受容の観点で類似性を持つ作品である。さらに、看過できないのは、その人気のみならず、「温泉」という舞台の反復においても共通性がうかがえることだ。近年、紅葉という作者、愛と金の主題に着目する従来の議論とは異なり、二作に通ずる「海辺」の舞台性から再検討したのは瀬崎圭二だが、二作の場所性にこうして留意が払われながら、「温泉」に関してはいまだ議論の俎上に上げられたことはない[6]。しかし、研究の領域では悉く忘却される「温泉」は、二作の勢いが未だ脈々と拡大する明治から昭和の時代においては重要トピックであり、ときに批判的に検討されるものであった。たとえば夏目漱石は、直接的に温泉という舞台、表象へのこだわりを示すわけではないが、『草枕』（「新小説」1906（明治39）年9月）冒頭で先行する温泉場小説二作を画工の口を借りて批判する。漱石は、冒頭で主人公画工に、「世間」的で、「人情を鼓舞」し、「西洋」的で、「同情」・「愛」・「正義」・「自由」の類の「浮世の勧工場にあるものだけ」[7]で成立するのが『金色夜叉』や『不如帰』だと言う。そして、それら二作品で見逃された場所性を求め、「那古井」という温泉場へと向かう人物として画工をキャラクタライズする。

また、川端康成は昭和になって刊行された『温泉』という雑誌において「温泉雑記」という題名で文章を寄せているが、そこで、次のように直接的に『不如帰』および『金色夜叉』の二作と温泉の関係性に言及する。

> 例へば「金色夜叉」や「ホトトギス」は余りに有名であるけれども、熱海や伊香保を書いた小説とは決して云へない。書いてあるのは、熱海や伊香保の景色だけである。舞台に借りたに過ぎない。（中略）お宮や浪子は熱海や伊香保の土地の人がどんな生活をしてゐようと、知つたことではない。眼中にあるのは、貫一と武男に過ぎない。彼等は旅行者である。温泉場の人間ではない 。
>
> 温泉を取り入れた小説や芝居は少くないが、その殆んどすべてはこの旅行者の文学である。ポスターの絵や広告写真に近いものである。宿屋の客の目の印象に過ぎない。温泉場から生れた文学ではない。（川端康成「温泉と文学」「温泉雑記」『温泉』日本温泉協会、1934年10月[8]——傍線部筆者）

漱石や川端は、文学上で温泉の舞台化に成功した作品の定点として二作を捉え、それに反旗を翻すことからこれらの批評や試作を出発させている。従来、これらの言説は、「漱石」や「川端」といった作家の創作戦略、あるいは「温泉文学」という言葉選びと枠組み提出の文脈でのみ取り上げられるものだった[9]。しかしながら、漱石と川端の両者が文学と温泉の繋がりを語るうえで『金色夜叉』と『不如帰』の温泉に留意しているという点において検討の余地があるのではなかろうか。

それでは、そうして漱石や川端に批判的に扱われた二作の温泉とはいかなるものであったか。確かに、漱石や川端が、固有名として日本の温泉の「景色」だけを借りて、西洋的な枠組みのもとに「伊香保」や「熱海」、「塩原」という舞台が醸成されているに過ぎないというように、『不如帰』においては冒頭の三節に、『金色夜叉』においては始めと（未完の）終わりにしか現実の温泉は登場しない。そうした点で、両者の指摘は的を射ている。しかし、本稿で着目したいのは、両作が（全体の時間を考慮すれば瞬間に過ぎないような）温泉での出来事を介し造型されたイメージに依拠して、その固有の温泉地を離れた場でも実体なきまま温泉を幾度も召喚していることである。両作は、固有名を借りながら、温泉という象徴やイメージを立ち上げ、また他方で、それによってなにかを捨象することで、「人情を鼓舞」する物語として成功し得たのではないか。その意味で、明確な輪郭線を持たない「景色」、空虚のシンボルともいえよう「熱海や伊香保」の温泉の反復に迫ることには意義があるのだ。

特に、現実的な場としての温泉がいかに現出するのかと同時に、イメージとしての温泉がいかに伝達されているのかに迫ることが重要な鍵となるだろう[10]。それぞれの登場人物の物質的な温泉空間との接触によってもたらされた主観的認識に基づいて表象される温泉が、物語内を、さらにそれを超えて読者にいかに伝播し、またいかに変容していったか。

その過程に着目しながら両作の読み直しが必要とされている。とりわけ本稿で着目したいのは『金色夜叉』についてである[11]。

『金色夜叉』は、『現代日本文学全集』（改造社、1926年12月刊行）や、『明治大正文学全集』（春陽堂、1927年6月刊行開始）の文学全集の第一回配本尾崎紅葉集に掲載されていることからもわかるように、尾崎紅葉という作家の代表作と冠されるばかりでなく、日本の「文学」のなかに返り咲く作品となって、その地位を確固たるものにしたものである。本作に登場する温泉は、既述したように貫一と宮の銅像が観光名所ともなっている「熱海」[12]、そしてその「熱海」に照応されるように一組の男女の重要な出来事が置かれた「塩原」があるが[13]、原作『金色夜叉』の物語に沿ってより細分化するとすれば次の三種類に分けられる。第一に、物語を動かす出来事の現場としての「熱海」、第二に、出来事の記憶が反復されるイメージとしての「熱海」、第三に、出来事の現場としての「塩原」の三種である。

本稿では、『金色夜叉』のこの三種の温泉表象に着目し、「熱海」以前と以後におけるイメージと記憶の重層的なズレとその膨張の過程、そして、その流れの転換点となる「塩原」の創出と伝播の過程に迫る。まず、第二節では、第一の「熱海」について、その場限りの固定的現場としてではなく、固有の歴史性、すなわち実空間の時代と価値観の変容を内包しながら構築される流動的な場として見直す。続いて第三節では、「熱海」の舞台を離れて以降も、そこでの記憶に基づいて現実的様相から離れ空虚に膨張する「熱海」のイメージを再検証し、第四節では、読者の受容という観点から「熱海」のイメージを払拭するための一戦略として「塩原」の下りを捉え直す。『金色夜叉』テクスト内部にある各々の温泉描出の過程を抽出するのみならず、読者の受容と作者の一戦略に留意しながら、「熱海」と「塩原」の両者の温泉の持つ記号としての可能性を解き明かしたい。なお、本稿における「温泉場」は、温泉の湧出する場、浴場のみならず、温泉宿、温泉街および、そこから遊興可能な領域を含めるものと定義しておく。

図１　現在の熱海[14]

図２　『金色夜叉』の熱海[15]

２．物語を動かす「熱海」と新旧のイメージ

まず本節では、第一の現場としての「熱海」について考察する。近代への移行期に生じた固有の歴史的変容・変動を背景に、「熱海」の新旧イメージが登場人物の間で対立し合い、その間の認識のズレ、亀裂が深まっていくことを明らかにする。

はじめに『金色夜叉』の「熱海」での出来事が発生するまでの経緯を説明しておく。かるた会の後、鴫沢家には富山家からの縁談が持ち込まれた（前編5）。それを貫一に言い出すことができず思い悩んだ宮は、貫一が学校に行っている間に母親と熱海へと発ち、父に打ち明けてもらうことにした。宮が何も言わず便りも残さずに湯治へと出かけたことを貫一は不審に思い（前編6）、その後を追って熱海へと出かけるが、そこで宮と富山の関係を知って激怒する（前編7）。熱海の海岸で、貫一は宮を問い詰め、宮は貫一を説得しようとするが、二人の思いは行き違い、貫一は宮を蹴り飛ばして宮の前から姿をくらましてしまう（前編8）。それが「熱海」の場面である。すなわち、『金色夜叉』において実際の「熱海」を舞台に展開するのは、富山と散歩する宮の姿を貫一が目撃する梅園（前編7）と、激怒した貫一が宮を蹴り倒す海岸（前編8）である。この場は、三角関係を築く登場人物三者が物理的に劇的な衝突を果たし、その間にある溝を浮き彫りにする場でもあった。

川村湊はこの両者の溝ないしすれ違いを、自分の美貌を「奏任以上の地位」と等価にあり「無限大のもの」と解釈する宮（つまり、貫一の地位は自分の美貌に等価ではないと解釈する宮）と、宮を幸福にするだけの愛情を持っていると自負する貫一の間に生ずるものと説く[16]。川村のいう「すれ違い」は、両者の間の金銭感覚（金銭的価値観）のズレによって生ずるものであるが、本節以下で指摘したいのは、「貨幣」の「幻想性」のみならず、「熱海」の問題が貫一と宮のすれ違いを決定づけていることだ。

まず、貫一が「熱海」に着く以前、宮が「熱海に向かった」後に分け、二者の「すれ違い」が発生し、軋轢が築かれる過程を追ってみよう。

> 遂に彼はこの苦（気分が優れない宮への貫一の平生以上の優しさに対する宮の「悩乱」――筆者注）を両親に訴へしにやあらん、一日母と娘とは遽に身支度して、忙々く車に乗りて出でぬ。彼等は小からぬ一個の旅鞄を携へたり。（中略）やがて帰来にける貫一は二人の在らざるを怪みて主に訊ねぬ。彼（宮の父隆三――筆者注）は徐に長き髯を撫でて片笑みつつ、
> 「二人はの、今朝新聞を見ると急に思着いて、熱海へ出掛けたよ。何でも昨日医者が湯治が良いと言うて切に勧めたらしいのだ。いや、もう急の思着で、脚下から鳥の起つやうな騒をして、十二時三十分ので。ああ、独で寂いところ、まあ茶でも淹れやう」
> 貫一は有る可からざる事のやうに疑へり。
> 「はあ、それは。何だか夢のやうですな（中略）然し、湯治は良いでございませう。幾日ほど逗留のお心算で？」
> 「まあどんなだか四五日と云ふので、些の着のままで出掛けたのだが、なあに直に飽きて了うて、四五日も居られるものか、出養生より内養生の方が楽だ。何か旨い物でも食べやうぢやないか、二人で、なう」
> 貫一は（中略）急ぎ出でしなればさも（置き手紙がないことも――筆者注）あるべし、明日は必ず便あらんと思飜せしが、さすがに心楽まざりき。（中略）
> 「実に水臭いな。幾許急いで出掛けたつて、何とか一言ぐらゐ言遺いて行きさうなものぢやないか。一寸其処へ行つたのぢやなし、四五日でも旅だ。第一言遺く、言遺かないよりは、湯治に行くなら行くと、始に話が有りさうなものだ。急に思着いた？急に思着いたつて、急に行かなければならん所ぢやあるまい。（中略）四五日ぐらゐの離別には（中略）あの人は平気なのかしらん。（前編6-1）

『金色夜叉』において「熱海」という言葉が初めて表出するのは、宮がそこに発ったことを告げる、その父隆三の貫一に対する発話においてである。宮およびその父隆三の思惑としては、熱海行きは、宮という当事者から離して貫一に宮の縁談話を納得させるために決行されたものであった。ここで父は、宮の熱海行きの経緯を医者によって持ち掛けられたものだとすることで説得力を保持しながら、宮と富山の縁談話を貫一に打ち明け、説得する役割を担っている。

しかし、それを聞いた貫一は、宮が熱海行きを「遽に」決行してしまうことに逆に不信感を募らせる。貫一にとって「湯治」とは、「急に思着」いて実行することではなく、「四五日」の短期的な療養でもない。「湯治に行くなら行くと、始に話が有り

さうなものだ。急に思着いた？急に思着いたつて、急に行かなければならん所ぢやあるまい」とあるように、「湯治」という前近代的な温泉にまつわる習俗を前提において、宮の熱海行きを、それと異質なものとして解釈している[17]。

宮の熱海湯治の経緯については、「医者」に「湯治」を勧められ、新聞で見かけた「熱海」に行くことを思いついたものと宮の父によって説明されていたが、その言い分において「熱海」は、「医者」に勧められ療養する「湯治」の場である一方で、「新聞」で宣伝され、「四五日」というような短期で済まされる保養（観光）地としての側面が強調されてもいる。実際、後述するようにいち早く近代的に発展する熱海は、当時の熱海の宿の新聞広告において、交通の利便性や保養地的側面から宣伝されていた[18]。

しかし、当時、この保養や観光が、現在のような感覚で誰もが容易に行なえるものではなかったことには留意すべきだろう。宮や貫一がどのような経路で「熱海」へと辿り着いたのかは本文で示されない以上、確かなことはわからないが、「出養生より内養生の方が楽」という父隆三が述べるように、一般的に「熱海」に行くことは「楽」なものではなかった。交通の利便性から言えば、現在のように国府津から小田原経由の熱海線の熱海駅が開業するのは1925（大正14）年3月のことであり、貫一と宮が訪問するずっと後のことである。彼らの「熱海」までの交通手段を「山駕籠」か「徒歩」あるいは「人車鉄道」だと指摘したのは川村湊だが[19]、最短最速の手段・ルートを選び突発的かつ短期間で熱海訪問を決行するには、資本（「金」）が必要になってくる[20]。新聞などでの宣伝を通して知られながら、資産あるいは地位を持つ特権的な立場にのみ開かれた新しい旅行形態である保養・観光の側面から「熱海」を解釈する宮および隆三と、前近代に由来する湯治的側面から「熱海」を解釈する貫一の間にあるズレの発生をここに確認することができるだろう。

これまで「すれ違い」の契機は、貫一の宮の足蹴の場となる「熱海」において探られてきたが、「熱海」到達以前の「熱海」にまつわる新旧のイメージが関与している。「熱海」での劇的な別れは、そこに到達する以前に貫一が「熱海」解釈をめぐって、価値観を共有していたはずの鴫沢一家との間にズレを認識し始め、宮の愛情の濃淡を問い始めたことに端を発するのである。

さて、このように時間的早急さ、資本と結びついた近代に根付く宮の解釈と旧来の感性に基づく貫一の解釈のズレは、「熱海」という現場を通していかに膨張していくだろうか。それを探るために着目すべきは、「熱海」で表出される富山と貫一の「熱海」に対する認識のズレである。まずは、熱海にやってきた富山の言動に着目してみよう。

> 「今朝です、東京から手紙で、急用があるから早速帰るやうに――と云ふのは、今度私が一寸した会社を建てるのです。（中略）私も今は随分忙い体、なにしろ社長ですからな。それで私が行かなければ解らん事があるので、呼びに来た。で、翌の朝立たなければならんのであります」
> 「おや、それは急な事で」
> 「貴方がたも一所にお立ちなさらんか」
> 彼は宮の顔を偸視つ。宮は物言はん気色もなくて又母の答へぬ。
> 「はい、難有う存じます」
> 「それとも未だ御在ですか。宿屋に居るのも不自由で、面白くもないぢやありませんか。来年あたりは一つ別荘でも建てませう。何の難は無い事です。地面を広く取つてその中に風流な田舎家を造るです。食物などは東京から取寄せて、それでなくては実は保養には成らん。家が出来てから寛緩遊びに来るです（中略）私折角思立つたものでありますから、それでは一寸其処までで可いから附合つて下さい。貴女が可厭だつたら直に帰りますよ、ねえ。それはなかなか好い景色だから、まあ私に騙されたと思つて来て御覧なさいな、ねえ」（前編7-1）

富山にとって、「熱海」の温泉場は、「寛緩」（ゆっくり）遊びに来るというより、簡単に消費できる場所としてある。富山は「急に」やってきて「急に」帰ることができ、さらに療養としての「湯治」というより「保養」の場として「熱海」を認識する立場なのだ。

ここには、性急な変事に気を留めることなく対応し得る資産家富山と[21]、幕府解体によって「急」（差し迫った状況）に苦しめられそれを厭う元幕府方武家の生まれの書生貫一[22]という明確な対比が表出されているわけだが、この両者の対比は、近世から近代への移行期における「熱海」の変容に裏付けられるものである。江戸期において熱海は、将軍の献上湯として知られ、多くの大名が湯治に訪れた[23]。また、そこは、近世において、将軍家や大名家だけで

なく、一般利用においても他とは区別されるような固有性を有する温泉地であった。前近代において湯治場と呼ばれる温泉地では外湯利用が一般的であったが[24]、熱海には内湯を備えた宿が存在していたため、そのような意味で近世的文脈においては「特別な湯治宿、温泉宿」がある温泉場として認識されていたと考えられている[25]。

他方で、こうした幕藩体制に因む特権性は、明治維新以後、政府の要人の保養地として開拓されることを通して、別のものへと塗り替えられていく。熱海は、明治維新以後、幕府による封建体制が崩壊し、湯株の管理体制に変化が生じるとともに、新政府の高官や政商たち、あるいは外国人旅行者の来遊場所となっていった[26]。また、「熱海富士屋会議」(1881（明治14）年1月)、「熱海古屋会議」(1881（明治14）年1月）などの会議が開かれたり、ドイツの最先端の温泉蒸気吸入器を導入した「喩氣館（きゅうきかん)」という医療機関が建設されたりしているように、明治政府における政治的要地となっていた。貞包英之は、熱海を例に、明治において言語と土地が資本と関係を取り結んできたことを示唆している[27]。

銀行資本家として生計を立てる新たな時代の勝ち組である富山にとって「熱海」は、我が物顔で悠々と過ごせる場だが、元幕僚の父を亡くし、新時代において書生となり立身出世を目論む負け組貫一にとっては奪われた地であり、身の置き場がない場所である。貫一と対比される富山の価値観へと宮が傾斜する過程を、近代移行期における「熱海」という固有の温泉場の変動・変容が浮かび上がらせるのだ。

現場としての「熱海」という温泉は、固定的であるというより、実空間の時代と価値観の変容を内包する流動的な場であったからこそ、貫一と宮の二者の関係の縺れを、誰もが気付きうるドラマティックさを帯び、現出し得た。「熱海」は、新たな時代において、台頭する階層にある者と没落する階層にある者とが、一時的に集結し価値観の衝突を起こす場としてあるばかりでなく、その場限りに留まらない「熱海」に対する認識のズレを、対比的そして輻輳的に映し出すものなのである。

3.「熱海」の記憶とイメージの反復

前節で見たように、『金色夜叉』において「熱海」は物理的な現実の場として劇的な場を構成するのみならず、到着する以前から登場人物の想像力を刺激し、登場人物の間のズレを誘発する場でもある。さらに、本節では、「熱海」が、そこでの出来事以後、時間的にも空間的にも離れた想像（記憶・イメージ）の領域において、いかに回帰され、浮遊しているのかを検討する。

『金色夜叉』の「熱海の浜」の出来事以後、「熱海」は、貫一と宮の当事者双方に回顧される。しかし、宮と貫一はそれぞれに異なるかたちで「熱海」での出来事を捉え返し、それに揺さぶられ込み上げる感情を露呈している。まずは、その「熱海」の捉え返しと反復の作業がいかにして展開されているのかを確認しよう。

まず、「熱海」以前に、「熱海」にいちはやく反応した貫一はどのように「熱海」を捉え返しているか。前節で見てきたように、貫一は近代化ないし資本主義化に歩調を合わせる「熱海」と宮の接近に懐疑を抱いた。その点で、貫一は、そこへ行き着く以前に既に準備された懐疑的な「熱海」イメージを、決定的出来事以後においても保ち続けている。

> 宮が今罪を詫びて夫婦になりたいと泣き付いて来たとしても、一旦心を変じて、身まで涜された宮は、決して旧の宮ではなければ、もう間の宝ではない。間の宝は五年前の宮だ。その宮は宮の自身さへ取復す事は出来んのだ。(中略）かうしてゐる間も宮の事は忘れかねる、けれど、それは富山の妻になつてゐる今の宮ではない、噫、鳴沢の宮！五年前の宮が恋い。(中略）少いながらも今の貨が熱海へ追つて行つた時の鞄の中に在つたなら……ええ!!」(中略）かかる折よ、熱海の浜に泣倒れし鳴沢の娘と、田鶴見の底に逍遙せし富山が妻との姿は、双々貫一が身辺を彷徨して去らざるなり。(中編7-1)

高利貸を営む貫一の心境にフォーカスされる中編第７章では、貫一は、「熱海」での出来事を捉え返し、「旧の宮」と「今の宮」を比して「旧の宮」が既に「取復」せないものであることを嘆いている。渡部直己が述べるように[28]、この訴えにおいて確かに「旧の宮」への貫一の固着が表出されているが、渡部のいう「旧」とは、「熱海」(の浜）を起点とするものでしかない。「少いながらも今の貨が熱海へ追つて行つた時の鞄の中に在つたなら」と訴える点を踏まえれば、「熱海」へ「追つて行つた時」すでに宮の心は「取復」せないものになっていたと貫一は解釈している。つまり、ここでいう「旧」とは「熱海の浜に泣倒れ」た宮ではなく、「熱海行き」を決

行する以前の宮のことなのである。前節で見たように、貫一は「熱海」にやって来る以前に恋人宮に対する疑念・懐疑を抱くようになるという質的変化を遂げ、それらの情動がまとわりつく「熱海」イメージを強固なものにしていくのだ。

一方、宮は、「熱海」以後、貫一より頻繁に、「熱海」の出来事を感情の動きを伴って繰り返し思い返し、イメージを収斂させていく。

> 得忘れぬ面影に肖たりとは未や、得忘れぬその面影なりと、ゆくりなくも認めたる貴婦人の鏡持てる手は兢々と打顫ひぬ。（中略）儚き恋しさと可懐しさとの朝夕に、なほ夜昼の別も無く、絶えぬ思はその外ならざりし四年の久きを、熱海の月は朧なりしかど、一期の涙に宿りし面影は、なかなか消えもやらで身に添ふ幻を形見にして、又何日は必ずと念懸けつつ、雨にも風にも君が無事を祈りて、心は毫も昔に渝らねど、君が恨を重ぬる宮はここに在り。思ひに思ふのみにて別れて後の事は知らず、如何なる労をやさまでは積みけん（中編4-2）

> 宮は傍に人無しと思へば、限知られぬ涙に掻昏（かきく）れて、熱海の浜に打俯したりし悲歎の足らざるをここに続がんとすなるべし。（中編4-3）

まず宮によって第一に回帰される「熱海」は、田鶴見子爵の館で、畔柳元衛（くろやなぎもとえ）に会うために館に訪れた貫一を発見する場面である。宮は「双眼鏡」を手にして庭を眺め、そこに貫一が居ることを認め、「鏡持てる手」を「兢々と打顫」わせる。宮は、「熱海行き」以前の貫一の宮への疑念を露知らず、「得忘れぬ面影」、「得忘れぬその面影」、「一期の涙に宿りし面影」と言葉を微妙にずらしながらも繰り返し、忘れ難い痼として「熱海」の出来事があることを畳み掛ける。そしてその「思い」は「朝夕」、「夜昼」問わずに、「四年の久き」など時間表現を伴って「絶え」ることなく「消え」もせずに残り続けているという。「熱海の浜に打俯」した「悲歎」をいまだに「続がん」とする。しかし、ここで注意すべきは、宮が思い返す貫一の「面影」ないし「形見」は、「朧」げな「熱海の月」かげのもと、「涙」を浮かべたときのそれだ。「心は毫（つゆ）も昔に渝（かは）ら」ないというときの宮の「昔」とは、貫一が既に宮への疑念を抱き始めている「熱海」の「海辺」時点でのこと、すなわち、宮が「渝（かは）ら」ないと言ったところで貫一は既に変化した後なのである。宮は、こうした時間的遅延、海岸以前に既に生じた認識のズレに気づくことなく、まるで突然にやって来た違和のように、「熱海」の「海辺」の光景を、月日さらには言葉を重ねて強調しながら拡張させるのだ。

このように、「熱海」は、現場として確かに宮と貫一の双方にとって「旧」と「今」との間に切断線を引く契機をもたらすものだが、その実際の現場で行なわれた一点の出来事として「熱海」はあるのではなく、時間的遅延と空間的距離を伴いながら、双方に異なる想像（イメージや記憶）の領域において反復している。宮が、貫一の面影と自身の悲嘆を連鎖させながらドラマティックに「熱海」を召喚するのに対して、貫一は、「熱海」へ着く以前に既に準備された懐疑的な「熱海」イメージを確実なものとしており、事前に用意されたイメージをスタティックに引き延ばし続けるのである。

従来批判されてきた『金色夜叉』の「熱海」という温泉の持つ空虚さの背景は、まさにここにあるのではないか。「熱海」から遠く離れた場で、時間的にズレ合いながらも、ズレ合う解釈を反復し続けて行く『金色夜叉』の構造が、出来事の現場であったはずの現実の「熱海」をぼかし、それを想像的に再構築してしまう結果だったのである。

また、登場人物の「熱海」以前の心の動きや、以後の出来事を捉え返す作業のなかで表象される「熱海」が主要なモチーフとなっているにもかかわらず、これまで物語の主要な出来事の現場となる「熱海」ばかりに光が当てられたのは、そこが受容者の情を揺さぶる劇的な（メロドラマ的な）一場面を構成していたからというだけではないだろう。「熱海」は、前編第７・８章以後、宮によって繰り返し話題に上げられ、以後の物語においては、宮の「熱海」解釈が前傾化されることとなる。

> 一月十七日をもて彼は熱海の月下に貫一に別れ、その三月三日を択えらびて富山の家に輿入したりき。（中略）父よりも母よりも宮は更に切なる誠を籠めて心痛せり。彼はただに棄てざる恋を棄てにし悔に泣くのみならで、寄辺あらぬ貫一が身の安否を慮りて措く能はざりしなり。（中編2-1）

> 熱海より行方知れざりし人の姿を田鶴見の邸内

に見てしまで、彼は全く音沙汰をも聞かざりしなり。（中略）計らずもその夢寐に忘れざる姿を見たりし彼が思は幾計なりけんよ。（中略）彼は日毎の徒然を憂きに堪へざる余、我心を遣る方無く明すべき長き長き文を書かんと思立ちぬ。（中編2-1）

宮は貫一が事を忘れざるとともに、又長く熱海の悲き別を忘るる能はざるなり。更に見よ。歳々廻来る一月十七日なる日は、その悲き別を忘れざる胸に烙して、彼の悔を新にするにあらずや。（中編2-2）

返す返すも悔き熱海の御別の後の思、又いつぞや田鶴見子爵の邸内にて図らぬ御見致候（中略）嬉くも御赦を得、御心解けて、唯二人熱海に遊び、昔の浜辺に昔の月を眺め、昔の哀き御物語を致し候はば、其の心の内は如何に御座候やらん思ふさへ胸轟き、書く手も震ひ申候。今も彼の熱海に人は参り候へども、そのやうなる楽を持ち候ものは一人も有之まじく、其代には又、私如き可憐の跡を留め候て、其の一夜を今だに歎き居り候ものも決して御座あるまじく候。（新続1-1）

宮は新続における手紙の中で、自分自身を表象するイメージを蓄える場所（トポス）として「熱海」を提示している。宮は、許しを得て再び「彼の」出来事の起こった「熱海」に貫一と二人で遊ぶことができたなら、どれほど「今」なおその「熱海」に人々がやって来ようとも、そのときの自分ほど「楽を持ち候ものは一人も」いないという。さらに、たとえそれが叶わなくとも「私如き可憐の跡を留め」る者はほかに「決して御座あるまじ」と後押しする。確かにアダプテーションで何度も再演される「一月の十七日」のセリフ（前編第８章）は、原作においても貫一によるものだった[29]。しかし、実際、その「一月十七日」の「熱海」という場は、この宮の「熱海」の捉え返し作業を通して、物語の随所で再現されるものなのだ。そしてこのように宮に「熱海」が捉え返されるたびに、受容者に出来事の現場である「熱海」の浜の場面に立ち戻らせる。いまなお宮が「可憐」によろめく姿で銅像となって留まる「熱海の浜」は、そうして印象付けられるのだ。

『金色夜叉』の「熱海」イメージは、貫一と宮の双方で異なり、現場となる「熱海」以前以後を通して変容するものである。しかし、それにもかかわらず、宮の「熱海」の解釈が反復し前景化しながら伝播することによって、「熱海」は実体のない空虚な場へと膨張していったのである。

４.「熱海」から「塩原」へ――温泉の伝播

ここまで、原作に沿って、第一の現場としての「熱海」とそれ以前、第二のイメージや記憶のなかで回帰される第一の「熱海」以後に照射してきた。原作テクストにおいて「熱海」という場が構築される過程は、その後の受容のなかで「熱海」が特権性を獲得し、さらには空虚と見做されるまでに膨張していった背景を示唆するものだった。

それでは、この「熱海」に対し、宮の手紙を受けた貫一が見る夢の場所へと接近し、当事者として経験した「熱海」での出来事に類似する事件を部外者として目撃する場である「塩原」はいかなる期待が託された舞台だっただろう。

「熱海」と同様に原作を追おうにも、作者の死により未完で終わってしまっており、その先で「塩原」での出来事がどのように貫一のなかで反復されていくのか、物語がどのように収束するかは不明である。「塩原」に十分な分析が与えられなかったのは、そうした作者の死により未完となったことが影響しているかもしれない。「熱海」がその場を離れた後に回顧する時間を伴うことでイメージや記憶のなかで膨張していくような過程が「塩原」において遂げられなかったことで、『金色夜叉』の受容において「熱海」のイメージが強化されてきたともいえる。しかし、いかに部分的であろうと「塩原」に秘められた可能性を探ることはできるのではなかろうか。

そこで、本節では最後に、現場としての「熱海」やイメージと記憶によって強化された「熱海」に代わる場（トポス）として、戦略的に召喚されるものとしての「塩原」への視座を開きたい。ここまでとは異なり、作者紅葉の戦略に推し量って考えをめぐらせることを通して、「熱海」同じく「ことば」ないし記号としての場（トポス）を演出する「塩原」という温泉が、『金色夜叉』の受容といかにかかわり合い、その拡がりに貢献することとなったかを明らかにしておきたい。

前節の引用で確認されたように、貫一は、「昔の浜辺に昔の月を眺め、昔の哀き御物語を致し候はば、其の心の内は如何に御座候やらん思ふさへ胸轟」く

という手紙を宮からもらい、宮との間に生じた軋みに向き合う契機を与えられていた。手紙をもらった時点で、貫一が宮を許して物語は収束される可能性もあったはずだが、そうならずに、この後、貫一の「塩原」訪問が挿入され、延長されていく。ここに達するまでも、作者紅葉は、『金色夜叉』連載の過程で、ネタ切れになって行き詰まりつつも、絶大な人気を誇る物語を収束させずにいた。それを踏まえると、「塩原」の場の挿入は、そうした作者の物語延長の方法論と関連しあうのではなかろうか。そのような仮定に基づいて改めて『金色夜叉』未刊末尾に着目したとき目に留まるのは、「温泉」という点で「熱海」と類似性を持ちつつ、それとズレ合うかたちで表出されてくる「塩原」という舞台である。未完結末部にある「塩原」という温泉場は、「熱海」での出来事にピリオドを打ちつつ、想像の場で反復され膨張した「熱海」に代わって物語を延長させる期待が寄せられる場、いわば「熱海」の置換に応じる設定を持ち得る場として位置付けられるのだ。

この場面の執筆にたどり着くまで、すでに演劇や読書評などで繰り返し取り上げられた「熱海」が、受容者にとってインパクトのある場だったことは、作者紅葉自身もよく理解していたはずだ[30]。その点、紅葉は、その「熱海」をいかにして乗り越えるかという困難に直面していたと考えられるのだ。

そうした紅葉の「熱海」越えの目論見は、「塩原」という場の選出の背景やその描き方からも抽出される。その手掛かりとなるのは次の二点である。第一に、貫一が自身の見た宮の「夢」および、宮との過去の出来事に遡行する場面が置かれるという点で、渓流を遡行した先に置かれる塩原温泉の立地条件が物語にふさわしい舞台を提供したということ。第二に、塩原が「熱海」と対比的に、それに代わる固有のイメージを有する場として、山水明媚な風景を留め、現実味を帯びるという性質を持っていたということである。

第一の点について、まず貫一の宮の「夢」(『続金色夜叉』）について確認しておこう。

> 車は駛せ、景は移り、境は転じ、客は改まれど、貫一は易らざる他の悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の独に倦み憊れつつ、始て西那須野の駅に下車せり。
>
> 直ちに西北に向ひて、今尚茫々たる古の那須野原に入れば（中略）塩原は其処ぞと見えて、（中略）進みて関谷村に到れば、人家の尽る処に淙々の響有りて、これに架れるを入勝橋と為す。（中略）抑も塩原の地形たる、塩谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に沂る片岨の、四里に岐れ、十一里に亙りて、到る処巉巖の水を夾まざる無きは、宛然青銅の薬研に瑠璃末を砕くに似たり。先づ大網の湯を過れば、（中略）福渡の里に入るなり。（続々1-2）

宮が貫一に対する悔悟の念から、断崖上で喉元を刺し、谷川の淵に身を投じて自殺するという夢を見た後で、貫一は所用で「塩原」へと出かけた。そこは、「箒川の流に沂る片岨」にあり、「到る処巉巖の水を夾まざる無き」状況である。貫一は、上野を発して北上し、「西那須野」の駅から川沿いに「塩原」にある複数の温泉へと向かうという地理的条件に基づいた現実的レベルでの遡行とともに、「夢」での出来事や過去の出来事へと接近し直すという想像的レベルでの遡行を果たすのだ。

次に、第二の点について、「塩原」の具体的描写から確認してみよう。梅園の様子や浜辺だけ抜き取られそこまでの行程は示されなかった「熱海」に比して、「塩原」はその行程から緻密にまた紙幅が割かれ描出されている。「上野」を発ち、「西那須野の駅」にたどり着くまで、汽車の車窓の風景が移り変わり、府県の境を越え、「客」が入れ代わり立ち代わり「改ま」る過程が描かれる。さらにそうした東京から当地への旅程ばかりでなく、続々編に浮き彫りにされる地理地形は、当時の「塩原」という場を忠実に再現している。「塩原」が、「塩谷郡」に位置し、「箒川」の傍らに「四里に岐れ、十一里に亙」って広がるとある点は、1891（明治24）年7月に刊行された『塩原温泉誌』の「地形」の記述にも重なっている[31]。さらに『金色夜叉』の「塩原」の場面には、当温泉誌に「勝」として紹介される「関谷村」の「入勝橋」、「白羽坂」、「回顧橋」に加え、「細瀑小瀑」といった名所名勝が順に取り上げられる[32]。

二節において近代において開発され新たな階級に支配される場としての「熱海」の実相について触れたが、「塩原」もまた新たな時代の切り替わりにより繁華を得た地であったという点では「熱海」と代わり映えのない地平を築くものだ。創始を古代に遡り、山間に位置し交通の便が悪いがために近郷の農家に農閑期に利用される温泉地であった「塩原」は[33]、1884（明治17）年に県令に迎えられた三島通庸の土木工事山野の開拓、道路整備により、大幅に

車馬の交通、運搬の便が改善され、従来とは異なる遊客をもたらして繁栄した場合だった[34]。

しかしながら、「塩原」の近代的変容は、観光地化を遂げる「熱海」とは質の異なるものである。なぜなら「塩原」の方は、交通の便が改善され新たな浴客を呼び寄せながらも、古来そこにある山水明媚な風景と「山中霊泉」[35]の神秘性から評価された場所であったからだ。この「塩原」を『金色夜叉』は「熱海」とは異なるかたちで物語に関わらせていく。

「塩原」は景観や地理的条件などの物理的実相に綿密に重ね合わせられるばかりでなくこの後に起こる「塩原」での出来事の伏線ともなる貫一の「夢」の風景に接近しながら表出されていることがわかる。「水の若く白み」、「有明の月冷」やかな朧げな夜の場景が用意され、「滝津瀬」のある場で宮の屍を背負って入水自殺を試みる貫一のその夢は、背負っていた宮の姿が一朶の白百合に変身するという神秘性を伴っている。「細瀑小瀑」がそこかしこに存在する貫一の夢は、川や温泉といった水に恵まれた「塩原」の固有の雰囲気へと重なり合い、心中未遂という出来事に結び付けられるのである。

このように「塩原」の場は、「熱海」より実際の固有の地理地形になぞらえられた現実的描写によって構成され、その場の霞がかった神秘的な側面が貫一の「夢」とリンクしながら出来事の現場として現出してくる。さらに見逃せないのは、「塩原」が「熱海」で見過ごされた温泉の入浴の場を描き込むものでもあることだ。

> 風呂場に入れば、一箇の客先づ在りて（中略）華車なる形成づくりは、ここ等辺の人にあらず（中略）察するに精神病者の類なるべし。（続々2）

> 走り行きて推啓けつる湯殿の内に、人は在らじと想ひし眼を驚して、かの男女は浴しゐたり。（続々3）

「塩原」では宿での出来事や、その風呂場（浴場）での出来事が描き込まれる。貫一は、ここで地元客ではない病を患う湯治客たちを目撃し、朝風呂に行った際には、同宿の男女の混浴を目にする機会に恵まれる。この同宿の男女は他でもなく貫一が心中未遂を助ける二人なのであり、「塩原」はその景色や地理地形といった温泉の外的要素のみならず、宿の内、入浴の場としての温泉の性質を利用して物語を展開させるのである。こうして固有の地理地形、景観、およびその「温泉」そのものの現実的様相を伴って現出される「塩原」は、「熱海」と差異化され、それと置換されている。ここに、紅葉が、「塩原」召喚を通して、漱石や川端に評されるような「熱海」に付随する空虚な空間性を払拭しようと試みていたことがうかがわれるのである。

さらに、この「塩原」の場は、美文のなかで再利用され、「塩原」が言葉としての温泉を広く受容させる契機をもたらすものとなったという側面においても、「熱海」に比類するものでもある。美文とは、明治20年代以降、自然主義文学が全盛期を迎える明治40年代頃まで、古典の形式にのっとり、美しい語句や、修辞を巧みに用いた文章のことを指す。それは、音読にふさわしいリズムある文体で、20年代登場する口語文体の対極に位置する文体であった[36]。文壇においての流行のみならず、「文章を正しく美しく書かうとするには、よほど注意して、美しい辞句を選ばねばなりません」（『少女と文藝』1908（明治41）年4月15日、72-73頁）[37]というように、作文教育などを通して指導され広く定着していた。この美文において繰り返し「塩原」の場は再現されることになった。

その「塩原」の美文使用は、例えば萩原朔太郎が従兄萩原栄次に宛てた手紙がある。朔太郎は、1908（明治41）年7月30日に大阪にいる栄次宛に「金色夜叉の塩原温泉」に行くことを知らせ、同年8月9日に、『金色夜叉』の「塩原」の道行き部分を引用し、次のように書き送っている。

> 之より行きて水あり、水あれば必ず橋あり、全渓にして三十橋、山あれば岩あり、岩あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、地あれば泉あり、泉あれば熱あり、全村にして四十五湯、尚かぞうれば十二勝、十六名所たれか一々かぞへうべきとは金色夜叉の一節に候が名にしおふ塩原の里[38]

のちの口語自由詩の完成者という評価からすると少し意外かもしれないが、書簡において朔太郎も那須塩原温泉への道行の美文を使っていたことがわかるのだ。萩原朔太郎の作品においては『猫町』ほどでしか温泉は登場しないが、『不如帰』や『金色夜叉』が流行した1900年代の栄次宛のなかでそれらに登場する「伊香保」と「塩原」の温泉について触れており、それらの作品の流行と、それらの作品における

固有名の浮上をうかがうことができる。他にも三島由紀夫が、同じく塩原への道行き部分を取り上げ、この名文が浄瑠璃や能の道行の部分と重なると述べ、道行という伝統的技法に寄せた日本文学の心象表現の微妙さ、時間性、流動性が活きている部分だと解説している[39]。「塩原」は、想像の領域で無限に膨張していく「熱海」とは別の方面に受容を拡大させ、作者の手の届かぬところで再演を繰り返されることとなったのだ。

「塩原」は、地形地理上の現実的様相を含み、山水明媚な神秘性を伴う場として描出され、「塩原」に導かれる以前の貫一の夢とリンクし、心の動きを誘う場として再構成されるものだった。未完に終わった原作においては、作者の「熱海」置換の戦略はこうした点においてうかがわれるのである。一方、その目論見は、作者の思わぬところで遂げられることにもなった。「塩原」は、美文の一節として手紙や日記などに記され再演されることとなり、「熱海」とは異なる「温泉」の記号化を果たしていたのである。

5．結び

『金色夜叉』の物語を動かす出来事の現場としてある「熱海」は、原作のみならずアダプテーションにおいて特権化され、再三再四受容される場であった。その温泉は、漱石に資本主義の世と結節することを非難され、川端に温泉を「舞台に借りたに過ぎない」空虚な場と批判されてきた。これらの批判は、その特権化される「熱海」が現実の場として登場するのが冒頭のみであるという点で肯けるものである。しかし、そこで指摘されるような実体の伴わない空虚な記号としての温泉がなぜ現出し得たのかについては未だ十分に明らかにされていない。そこで本稿が試みたのは、『金色夜叉』において「熱海」固有の現実的様相が離散してしまう背景を追跡し、それに代わる場として「塩原」が立ち上げられ、温泉の記号化が収斂される過程を明らかにすることである。

まず、第二節では、第一に浮上する出来事の現場としての「熱海」について、近代初期の変容の実態に留意しながら、その場限りの固定的現場としてではなく、実空間の時代的変動と価値観の変容を内包する流動的な場として見直した。長期療養の湯治場として温泉を理解する貫一は保養的価値観でそれを利用する宮への疑念を募らせる。劇的な舞台としての「熱海」において初めて二人の間に亀裂が入るかのように見えるが、「熱海」という温泉の持つ新旧のイメージの対立がその亀裂を事前に用意していたのである。

続いて第三節では、「熱海」の浜を後にして、宮と貫一が双方にどのように「熱海」の捉え返し作業を行なうかを分析した。事前に用意した宮への疑念を確実なものとしていく、ある種固定的な貫一の「熱海」解釈に対して、宮は「熱海」の浜での貫一の「面影」や自身の心的な動きをドラマティックに再演し続ける。こうして「熱海」の舞台を離れて以降、そのメロドラマ性を補強するかのような反復の身振りによって宮の「熱海」解釈が前景化され、現実的様相から離れた空虚さを伴う「熱海」イメージが構築されていたのである。

そのうえで、第四節で試みたのは、ここまでの分析とは異なり、作者の戦略という側面を推し量って、「熱海」から「塩原」への置換の問題を解き明かすことであった。「熱海」とは異なり、「塩原」の場では、その固有の地理地形や風景が再現されるばかりでなく、それらの場景や「温泉」の持つ固有の場の特性が登場人物を駆動する。そうして、作者が目論んだ「熱海」のイメージの乗り越えの戦略と、「塩原」が美文のなかで再現され作者の手の届かぬところで「熱海」に比類する記号化の一途をたどったことを明らかにした。

『金色夜叉』の温泉は、漱石の言うように確かに資本と関係を取り結び、川端の言うように旅行者によって切り取られた中身のない空虚さを留める一場に過ぎなかった。しかし、一部に過ぎないその場所は、1900年前後に著しく資本主義化する温泉という場の動向、そこに訪れる人々の性格の変調やズレの内実を表出しうる場（トポス）であった。『金色夜叉』において、「熱海」と「塩原」はともに、出来事の一現場として役割を与えられるばかりでなく、それぞれに異なるかたちで再創造され増幅されるものだったのだ。紅葉の生と死との間で宙づりにされながらも、長大な物語を持続ないし延命させてきた『金色夜叉』を突き動かしてきたのは、まさにそうして登場人物の想像力と切り結び、あるいはイメージを連鎖させる温泉だったのである。

謝辞

本稿は、日本温泉文化研究会2022年度第3回定例研究会（2022年9月4日開催）の発表に基づくものである。定例研究会に出席された参加者、および拙発表に関しご意見いただいた愛知大学短大部安智史先生、法政大学教授岡村民夫先生には感謝を申し上げる。

注

1 本稿における引用は、尾崎紅葉「金色夜叉」大岡信編『紅葉全集』(岩波書店、1993年）に拠るものとする。ルビは必要と思われる箇所のみ記載し、その他は省略した。ブロック引用括弧内には、前編、中編、後編、続、続続、新続の編および章を記す。なお、傍線による強調は筆者によるものとする。

2 『読売新聞』投稿欄「葉がき集」に多くの読者評が寄せられ、その人気ぶりが示唆される。関肇は、「小説それ自体に内在する価値」を認めながら、『読売新聞』の地方購読者獲得のなかで、小説読者を地方へと拡大し、「葉がき集」における読者の感想・苦言などの反応に作者が紙上で応答するという過程を辿りながら、『金色夜叉』が生成されていったことを指摘する（関肇『新聞小説の時代――メディア・読者・メロドラマ』新曜社、2007年)。

3 伊狩章『硯友社と自然主義の研究』桜楓社、1975年。

4 瀬沼茂樹「家庭小説の展開」〔『文学』1957年12月〕『明治文学全集93　明治家庭小説集』筑摩書房、1969年、421-430頁、小森陽一ほか編『メディア・表象・イデオロギー――明治三十年代の文化研究』小沢書店、1997年。

5 関、注2前掲書。

6 文学の文脈においては、瀬崎「明治後期の海辺の物語――口絵と演劇に見るイメージ」(『海辺の恋と日本人　ひと夏の物語と近代』青弓社、2013年)、コンテンツ・ツーリズムの文脈においては天野宏司「熱海におけるコンテンツ・ツーリズムの普及――金色夜叉を事例にして」(『歴史地理学』56（1)、歴史地理学会、2014年1月、32-49頁）がある。なお、本作に関する評論・論考は、小説連載途中から現代の先行論に至るまで、「金」と「愛」の二大テーマ性を指摘するものが多い。それは、作者自身が「凡そ人生には二つの大なるPOWERがあつて、社会の結合を保つて居る。それは何だといふと、即ち愛と黄金だ」とし、「間貫一の一身は愛と黄金との争を具象的にあらわしたもの」(「金色夜叉上中下篇合評」『芸文』1902年8月）と述べていたことなどにもよる。また、そうした二項対立的な二大テーマの対立図式を崩し、三項目を立ち上げる議論も存在する（川村湊「〈戯作〉を貫くもの２――尾崎紅葉」『異様の領域』国文社、1983年、219-242頁、渡部直己「「偸聞（たちきゝ)」小説の群れ――馬琴「稗史七則」と逍遥・紅葉」『日本小説技術史』新潮社、2012年、23-89頁)。

7 夏目漱石「草枕」〔初出『新小説』1906年9月〕『日本近代文学大系25　夏目漱石集』角川書店、1969年、167-306頁。

8 本稿では『温泉』(日本温泉協会、1934年10月、30-32頁）を参照したが、管見の限り、原本以外では、『川端康成全集』27（新潮社、1982年、77-79頁）において参照可能である。

9 川村湊『温泉文学論』新潮社、2007年、岡村民夫「夏目漱石の明治三十九年――日本近代温泉小説の誕生」『論集　温泉学Ⅲ――温泉の原風景』岩田書院、2013年、155-198頁、李明喜「〈温泉場〉に託した物語――川端康成「温泉文学」の位相と『雪国』」『論集　温泉学Ⅲ――温泉の原風景』岩田書院、2013年、199-238頁、田村嘉勝「川端康成と温泉文学――「伊豆の踊子」「温泉宿」「雪国」をもとに」『芸術至上主義文芸』(41)、2015年11月、84-91頁、浦西和彦編『温泉文学事典』和泉書院、2016年、渡辺賢治「温泉と人をつなぐもの――文学・擬人化・コンテンツ」温泉むすめ公式サイト https://onsen-musume.jp/news/23182（2023年10月31日最終閲覧)。

10 後者のイメージ伝達の問題については、バシュラールの「物質的想像力」という概念がヒントとなるだろう。バシュラールは、外見上の変化にも拘らず同一性を保つことができる物質性に着目し、幼児期の忘却された体験によってではなく、物質との接触による快不快の感情によって形作られる無意識に訴えかけるものとしてイメージを捉え直した。こうしたバシュラールの知見を借りるとすれば、「温泉」という物質的な空間との接触によって登場人物それぞれの主観的認識に基づき温泉「イメージ」が形作られることは、重要であると考えられる（ガストン・

バシュラール『空間の詩学』岩村行雄訳、筑摩書房、2002年）。

11 『不如帰』については拙稿において検討したため、そちらを参照されたい（拙稿「明治30年代と〈始まり〉の「伊香保」――徳冨蘆花『不如帰』における幸福の偽装」東アジアと同時代日本語文学フォーラム編『跨境　日本語文学研究』(16)、2023年6月、117-134頁）。

12 注6のほかに、注2関前掲書などがある。

13 菅聡子「百合とダイヤモンド――『金色夜叉』の夢」〔『淵叢』(7)、1998年3月〕『メディアの時代――明治文学をめぐる状況』双文社出版、2001年、103-126頁、石井和夫「〈死を覚悟する女〉はいかに受け継がれたか――『金色夜叉』から『其面影』『それから』へ」『福岡女子大学部紀要――文芸と思想』(66)、福岡女子大学、2002年2月、39-52頁、渡部直己、注6前掲書。

14 熱海市観光協会公式観光サイト「お宮の松／貫一お宮の像」https://www.ataminews.gr.jp/spot/113/（最終閲覧2023年9月4日）。

15 尾崎紅葉『金色夜叉　前編』(口絵武内桂舟画)春陽堂、1901年。

16 川村、注6前掲書。

17 前近代において療養を目的とした「湯治」とは、二、三週間をかけて行なわれるものであり、短期で滞在し即効性が見込まれるものではなかった。温泉場やその周辺の景勝地は、前近代において観光目的というより湯治療養や養生を目的として利用され、後者は長期滞在する湯治者のための気晴らしや運動の場として機能していたといえる（日本温泉文化研究会編『温泉をよむ』講談社、2011年）。例えばそれは、『旅行用心集』で、箱根温泉について周辺の「江の嶋・鎌倉・金沢辺、勝地」で「気鬱を散」すことができ、「養生の為には能湯治場なり」と述べられていることからもわかる。

18 例えば、後述喩瀛館は、施設自体に「浴客消閑娯楽の為」の設備を整え宣伝している（「朝日新聞」1897（明治30）年1月6日付、朝刊4頁）。

19 人車鉄道とは、人が車を押して走らせる鉄道のことである。「豆相人車鉄道」は、1896（明治29）年に小田原-熱海間が開通した。客車用の車両は、上中下の三階級があり、定員は上等四人、中等五人、下等六人乗りの車両を二、三人の人夫が押して走らせていた。となった（川村、注9前掲書）。

20 宮と父が、金をかけなければ「急」にやって来られない場所として「熱海」を選定し、貫一が後から追って来られないよう画策したことが示唆されもするだろう。

21 「台東区で名を馳せる富山銀行創設者であり、区議会議員の富山重平の息子が、富山唯継」(前編1-3)。

22 「亡き人が常日頃から言っていた。いやしくも武家の家柄の生まれなのだから、我が身はともかく、息子・貫一こそは世間に侮られるようではならない。彼を大成させて、願わくば再び上流階級の座に立たせてやりたいのだと。貫一はいつもこの台詞を聞かされ、隆三もまた会うたびそのように愚痴られていた。」(前編3-1)。

23 初代徳川家康の代から利用され、4代将軍家綱の代から熱海温泉の湯を熱海から江戸城まで運ばせる「御汲湯」が始まり、その後歴代徳川将軍に継承されている（熱海市『熱海温泉誌――市制施行八〇周年記念』2017年、今野信雄『江戸の風呂』新潮社、1989年、山田兼次『熱海風土記　正』伊豆新聞社、1978年）。また、本陣である今井家の宿帳には、1629（寛永6）年から1845（弘化2）年間の大名湯治の記録が残されている。

24 病気回復などを目的に長期滞在できる宿があり、そこでは入浴や飲食は提供されず、湯治客は共同浴場に通うのが一般的であった（注17前掲『温泉をよむ』）。

25 大久保あかね「熱海における旅館業の成立と発展――近代から高度経済成長期まで」熱海市『熱海温泉誌――市制施行八〇周年記念』2017年、142-149頁。

26 たとえば1874（明治7）年に前島密などの官僚10名による共同出資で設立された「真誠社」という温泉旅館は、政府要人に加え、1875（明治8）年に内務卿大久保利通の認可で外国人旅行者受け入れの決定が下されたことを受け、外国人旅行者に利用された。その宿帳の記録には、陸奥宗光や伊藤博文などの政府要人、外国人旅行客の名が連ねられている。

27 貞包英之は、その分析において小説の内容に殆ど触れることはないが、『金色夜叉』の熱海という空間を介して「資本」を巡る問題へと結びつけようとしていたという点で示唆的である。貞包は、幕藩体制の土地編成の在り方を、「或る種の固定された地盤として、静態的な配置の下」

に置かれたものだとする。一方で、近代のそれは、活発な「資本の運動」に順応するものであり、「幕藩体制における空間編成を廃棄し、土地に或る種の流動性を与えようとしていた明治国家の試みに連動するもの」と見做す。近代の熱海は、まさしく後者の「資本」によって流動性を与えられた土地、すなわち「言語と資本が充当されることで出来上がった」「観光地」であり、1900年前後の「言語・土地・資本」の「相関関係」によって成立した場として捉えられた（「言語・土地・資本――一九〇〇年前後における『金色夜叉』の受容について」『比較文学・文化論集』(17)、東京大学比較文学・文化研究会、2000年2月、55-68頁）。

28 渡部、注6前掲書。

29 「一月の十七日、宮さん、善く覚えてお置き。来年の今月今夜は、貫一は何処でこの月を見るのだか！再来年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！可いか、宮さん、一月の十七日だ」、「宮さん、お前から好くさう言つておくれ、よ、若し貫一はどうしたとお訊ねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晩に気が違つて、熱海の浜辺から行方知れずになつて了つたと」(前編8)。

30 関、注2前掲書、73頁。

31 「東西四里南北十一里の幅員を有し地形は凹凸四方山を負ひ東方に起て斜に北方に走る箒川其中間を流れ」とある（杉田丑太郎編『塩原温泉誌』杉田丑太郎、1891年、1-2頁）。なお、『塩原温泉誌』に限らず、1890年代の地誌・温泉案内等においても同地形の有り様を確認することができる（垣本源次郎『塩原温泉路次之栞』垣本源次郎、1899年、上野雄図馬『夏わすれ：一名・塩原温泉紀勝 那須七湯紀勝』観光堂、1893年、田中正太郎編『塩原温泉紀勝』田中正太郎、1897年）。

32 注31前掲『塩原温泉誌』においては、「温泉及風景」の項目で、「塩原の勝を記するは宜しく関谷より始むべし」として「入勝橋」をはじめとする名勝が列挙されている。田山花袋『一日の行楽』(博文館、1918年）というエッセイでは、塩原は、「関谷に来ると、箒川は既に平凡でない風景をその前に展開して来る。見返り橋、見返りの瀧などがその附近にある」と紹介されている。このような記述と照合させてみても、『金色夜叉』が塩原の現実的な場景を映し出そうとしていたことがわかる。

33 注31前掲『塩原温泉誌』。

34 三島通庸による開拓は、早くも同時代の案内書・地誌等において触れられている（全て注31前掲『塩原温泉誌』、『塩原温泉路次之栞』、『夏わすれ：一名・塩原温泉紀勝 那須七湯紀勝』、『塩原温泉紀勝』）。

35 注31前掲『塩原温泉誌』。

36 湯本優希『ことばにうつす風景――近代日本の文章表現における美辞麗句集』水声社、2020年。

37 『少女世界』の臨時増刊号として刊行された。嵯峨景子は、こうした作文における美文使用の推奨が為された結果、1910-1911年頃に美文的な文体の読者投稿の数が急増し、「この時期に少女の美文表現が読者に広まっていた」とする（嵯峨景子「『少女世界』読者投稿文にみる「美文」の出現と「少女」規範――吉屋信子『花物語』以前の文章表現をめぐって」『東京大学大学院情報学環紀要　情報学研究』(80)、2011年3月、108-109頁）。

38 引用は、『萩原朔太郎全集　補巻』13（筑摩書房、1989年、141頁）に依拠する。その際、萩原隆『若き日の萩原朔太郎』(筑摩書房、1979年）も参照した。

39 三島由紀夫「解説」『日本の文学4 尾崎紅葉・泉鏡花』中央公論社、1969年、500-501頁。